【 5 】

氏　　名	松本（まつもと）　佑介（ゆうすけ）
学 位 の 種 類	博　士（医学）
学 位 記 番 号	第 ４ ４ ８ 号
認 定 課 程 名	防衛医科大学校医学教育部医学研究科
学位授与年月日	平成２６年２月１３日
論　文　題　目	感染性侵襲が消化器系悪性腫瘍増殖に及ぼすメカニズムの研究
審査担当専門委員	（主査）杏 林 大 学 教 授　正 木 忠 彦
	自治医科大学 教 授　菅 野 健太郎
	杏 林 大 学 教 授　滝 澤　始

審 査 の 結 果 の 要 旨

さまざまな悪性腫瘍において，術後の感染性合併症の発症が癌の長期的予後を悪化させるとの報告がなされているが，そのメカニズムについては未だ明らかではない。申請者は，まず臨床的検討として，これまで検討されていなかった胃癌根治切除例での検討を行い，術後感染性合併症特に縫合不全の発症が癌特異的な予後を悪化させる要因であることを示した。次に動物実験で，腫瘍細胞を脾臓に接種した後に感染性侵襲である盲腸結紮穿刺(CLP)を加えた「腫瘍細胞脾接種＋CLP」モデルマウスを用いて肝転移を指標に免疫学的評価を行った。その結果,「腫瘍細胞脾接種＋CLP」モデルマウスでは肝転移がより早期から認められ，生存も不良であること，さらに全身的かつ肝局所において抗腫瘍免疫能の低下が示唆され，特に肝臓においては NK 細胞の量的・質的低下に起因する単核球の抗腫瘍活性の低下が証明された。

以上より，感染性侵襲による宿主の抗腫瘍免疫能低下が肝転移を促進するメカニズムの一端であると結論した。本研究で得られた結果は，術後に感染性合併症を発症した患者に対する新たな治療戦略の可能性を示すもので，今後の悪性腫瘍患者の予後向上に向けて，臨床的に大きな意義を有するものと考えられる。よって，本論文の学術的価値は高く博士（医学）として合格と判断した。